

メタ言語否定について : 話し手の意図と聞き手の解釈

著者	田中 廣明
雑誌名	研究論集
巻	73
ページ	1-16
発行年	2001-02
URL	http://doi.org/10.18956/00006362

メタ言語否定について

—話し手の意図と聞き手の解釈—

田 中 廣 明

1. はじめに

本稿では、「メタ言語否定(metalinguistic negation: 以下 MN)」について考察する。Horn (1985: 133, cf. 1989: 363)は、メタ言語否定の特徴を次のように述べている。

(1) “...[metalinguistic negation] must be treated not as a truth-functional or semantic operator on proposition, but rather as a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatsoever—including the conventional or conversational implicature, its morphology, its style, or its register, or its phonetic realization.” (Horn 1985: 133)

すなわち、MN とは、概略、「命題に対しての真偽値的・意味論的演算子ではなく、前言の発話に対して反対する(異議を唱える、否認する)ための装置であり、その際否定されるのは(命題ではなく)慣習的・会話的含意、発音、形態素、スタイル、使用域などである」として

いる。典型的な発話の例は以下のようなものである。

(2) a. We don't eat tom[a:təuz] here, we eat tom[eiDəuz]. (発音)
b. He isn't neurotic OR paranoid; he's both. (一般会話の含意)
c. The king of France isn't bald—there is no king of France. (前提)
d. I didn't manage to trap two monGEESE—I managed to trap two monGOOSESES. (形態素)
e. Grandma isn't feeling lousy, Johnny; she is indisposed. (スタイル/使用域)

(2a)は「発音の仕方」、(2b)はどちらか一方が真であれば良いという「一般会話の含意(generalized conversational implicature)」、(2c)はフランスには王様がいるという「存在前提(existential presupposition)」、(2d)は mongoose の複数形の「形態素」、(2e)は気分が悪いという「informal なスタイル」のみを否定してる。これらの例は、真理条件的(truth-functional)な意

味(命題内容)を否定している「記述的否定(descriptive negation: 以下 DN)」ではなく、命題に付随する使用条件などを否定していると考えられることができる。例えば、(2b)なら、A or B を否定すると通例の DN では neither A nor B と同義になるところであるが、or という語の使用条件(一般会話の含意)を否定していると見ることができる。これに対して、通例の DN とは以下のような例である。

(3) We didn't see the hippopotami—we saw the rhinoceroses. (吉村 2000a)

(3)は「カバを見たのではなく、サイを見たのだ」と言うのであるから、後半の we saw the rhinoceroses という修正節(correction clause)は、(2)のように発音、含意などの非命題的な意味を修正しているのではなく、命題内容そのものを修正している。

2. メタ言語否定

2.1. メタ言語否定の特徴

田中(1998a)であげた例は、メタ言語的であろうか。

(4) Quark: You do not entertain much here, do you?

Major Kira: Oh, I *entertain* a lot. I just don't entertain you. (*Star Trek: Deep Space Nine* 米 TV)

Deep Space Nine (宇宙基地) のレストラン・バーの主人クワークが、「少佐、あなたはあまり人を呼ばないんでしょう」と言うと、クワークを嫌っているキラ少佐(女性)は「そんなことはないわ。たくさん人を呼ぶわよ。あなたを呼ばないだけよ」と切り返している。キラ少佐の言葉は、It's not like that. I entertain a lot.(=I don't "not entertain much here.")と考えてよく、相手の言葉をエコーした二重否定となっている。

では、この(意味構造としての)二重否定は、(2)のように「メタ言語的(metalinguistic)」なのであろうか、(3)のように「記述的(descriptive)」なのであろうか。It's not like that の not (あるいは I don't "not entertain..." の don't) は何を否定しているのであろうか。もし、後続する文が I like parties. とか I will invite you soon. とかであれば、相手のいう命題内容は正しくないとする記述的な(二重)否定ということになる。ところが、I just don't entertain you. と相手の期待と裏腹な言葉で一撃を与えて(ぎゃふんと言わせて)いる。クワークは「ぼくを呼んでくれないのは、あまり人を呼ばないからなんでしょう」、だから「ぼくを呼んでほしいな」という期待を込めて言っているのに対し、キラ少佐はその良からぬ期待感を関知し、その期待感を否定している。「記述的否定(DN)」が否定するはずの命題内容を否定しているのではなく、「期待感」という connotation を否定しているのである。それゆえ、この(二重)否定は「メタ言語否定(MN)」ということになる。二重否定は肯定なので(表面には否定は現れていない)、「メタ言語肯定」と呼ぶことができる。

(4)からは、次のようなことが主張できると思われる。

- (5) a. MNは「エコー否定」である。エコーの内容は、どの程度自分の信念として否定しているかによって、MNかDNかに区別することができる。ただし、エコーは前言に限られず、一般的な想定や百科辞典的知識に対してでも良い。
- b. 前言の話し手(=聞き手)の発話意図と、MNの話し手の発話意図が異なる
- c. MNと後ろの修正節は矛盾関係(contradiction)にある。ただし、それは、MNの話し手の意識の中では矛盾ではない。聞き手(=前言の話し手)にとっては矛盾となる。
- d. MNと感ぜられるためには、話し手が前もって量的・質的な上限を持っていなければならない。(cf. Levinson 2000, 五十嵐 2000)

以下、この順番で考察を進める。

2.2. エコー否定

Carston (1996, 1998a, b)は、MNの唯一的な本質的特徴はエコー否定であると主張している。

- (6) “The correct generalization about the metalinguistic cases that the material in the scope of the negation operator, or some of it at least, is echoically used in the sense of Sperber and Wilson (1986), Wilson and Sperber (1988, 1992).” ... “This, I claim, is the crucial property of so-called metalinguistic negations: the representations (or a part of it) falling in the scope of negation operator is implicitly echoic.” (Carston 1996: 320-321) (下線は筆者)

Sperber and Wilson (1986)と Wilson and Sperber (1988, 1992)のいう意味でエコー的というのは、use/mention という区別をした場合 mention を表すということである。¹⁾吉村(2000a)は、Carston (1996)から以下の例をあげ、「真理条件的内容のエコー否定は、記述否定(DN)と区別できないことがある²⁾とし、Carston に反して、エコー否定が MN の本質的特徴ではないとしている。

(7) A: Mary seems happy these days.

B: She isn't HAPPY; she just put on a brave face. (Carston 1996: 324)

では、(7)は MN であろうか、DN であろうか。もし DN ならば、エコー否定という特徴が MN に限らないことになる。答えは DN であろう。ただし、DN もエコー特性を持つことは認められても、MN のエコー特性とは異なることに注意する必要がある。確かに(7)は、相手(A)の言葉を受けて「幸せではない」といっているのであるが、「幸せである」というエコーした命題内容に自分の信念として否定を述べている。すなわち、「幸せである」という命題は「偽」とであると判断を加えていることになる。なぜなら、後ろで、「彼女は精一杯そう取り繕っている(平気な顔をしている)だけだ」と、「幸せではない」ことの理由を述べているからである。

(2a-e)の MN のように、後ろに矛盾する修正表現を持ってきているのではない。

Carston(1996)は、(7B)をエコー否定(MN)ととると、「分離的態度(dissociative attitude) (相手の言葉をどの程度自分と遊離させるかという態度)」が強いと述べているが、B が She isn't happy に含ませる態度(この場合は「嫌悪的、否定的、拒絶的」なものであろう)だけではなく、エコーして否定した内容をどの程度自分の信念としているかが重要であろう。では、MN のエコーとはどういうものであろうか。

(8) A: Don't deprive us of your lecture on negation.

B: I won't deprive you of my lecture on negation; I'll spare you it. (Carston 1998a)

(8)は(7)と同じように前言をエコーしている。ただし、エコーした内容が前言の命題を含むかどうか、すなわち自分の信念として否定できる内容であるかどうかの問題となる。エコーするものは次の3つが候補となる。それは、①「命題」のみ、②「命題」以外の「使用条件(含意、音声など)」、③「命題」プラス「使用条件」(van der Sandt 1991)である。①はほぼ Burton-Roberts(1989)の言うことに等しい。すなわち、命題部分をエコーし、修正節を聞いて矛盾であると感じ、メタ言語的な解釈へ向かう方策である(詳しくは、後述を参照のこと)。②はここで筆者がとりたい立場である。すなわち、メタ言語否定とするのはあくまでも B の話し手であるという立場である(詳しくは、後述を参照のこと)。③とすると、否定(演算子)が2種類あることになる(ただし、van der Sandtはこの点は考えていない)。「命題」と「使用条件」の両方を引き取っておいて、「命題」のみを否定するエコー否定(DN)と「使用条件」のみを否定するエコー否定(MN)に分けなければならない。これも否定するものと否定されるものを考えた場合、複雑すぎて受け入れられないとする立場が大勢を占めている(cf. Carston 1998a, Burton-Roberts 1989)。結論として、MN のエコー否定では、エコーするものは「使用条件」のみであり、それを話し手の信念として、すなわち真偽値の間える命題としてではなく、(一種類の否定演算子で)否定していることになる。

次に、(6)で Carston は、MN は implicitly echoic (非明示的エコー)と述べ、explicitly echoic (明示的エコー)ではないとしている。明示的エコーとは、次の(9)に見られるようなエコーであり、これは MN の「感わし発話(garden-path utterance)」³⁾の機能がないと Carston(1996: 321)は言う。

(9) It's not correct to say that you saw two 'mongeese'; you should say 'mongooses'.

ただし、(7)のような DN の非明示的エコーにもタイプは異なるが「感わし発話」的な意味が存在し、これも MN だけの特質ではないと考えることができる。⁴⁾確かに、エコー否定は MN だけの決定的な特質ではない。ただし、エコーの意味を「話し手の信念として否定できないもの」と考えれば、これは大きな特質となりうる。

では、前言(先行発話)のない MN はどうであろうか。

(10) バースデーカードの表書き: This Birthday Card is NOT from one of your admirers.

中身: It's from TWO of your admirers. Happy Birthday from both of us. (Carston 1996)

(11) 「末恐ろしいピッチャーじゃなくて、もう恐ろしいピッチャーだ。」1999年4月27日ロッテの黒木投手が西武の新人、松坂大輔を評して。

(10)は言葉として明示的な前言(先行発話)がない例である。(11)も同様に黒木投手がインタビューの最中に言い出した言葉である。ただし、これはエコーがないと反論される性質のものではなく、「一般的な想定(general assumption)」や「期待(expectation)」「常識(common sense)」「百科辞典的知識(encyclopedic knowledge)」にエコーしていると考えられるものである。(11)は、The birthday card is from an admirer. という想定を仮定した上での発話であり、(11)も「松坂投手は末恐ろしいほどすごい投手だ」と一般には思われているであろうとする黒木投手の想定がある。

2.3. express/communicate と発話意図

吉村(2000a, b: 23)は、「メタ言語否定によって否定されるものは、まさに、このエコーの元になるものによって、express されているが、communicate されていないものである」とする。express されているものとは、「ある言語形式を用いることによって、必然的に伴われるもの」であり、communicate されているものとは、「(まわりにある様々な情報から) 聴者が取り上げてくれるように話者が意図していることを話者が明らかにした想定」(Sperber and Wilson 1986/1995)であるとする(吉村 2000b: 22-23)。吉村(2000b: 23)の例で express されたものと communicate されたものを見ておこう。

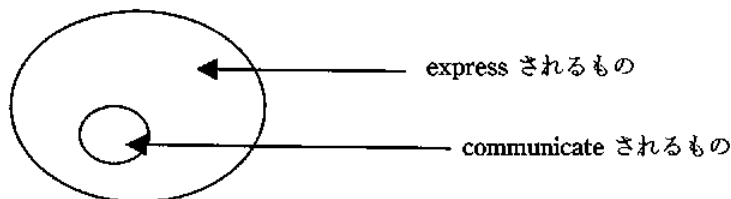
(12) A: You resemble Mr. Yoshioka very much, who taught me English in my high school days. You must be his daughter.

B: I'm not his daughter—he's my father.

A は大学の若手教官、B は新入生とすると、「...A は、自分が明示的に伝達しようとした『恩師と B が親子である』というポイントと異なる部分に異議を唱えた B に少し面くらひ、B の自立心のようなものを感じる。... (中略) ... (この参照点構造による概念化は) express されていると考えなければならないが、それは A が意図的に communicate しようとした内容ではない」と吉村(2000b: 23)は考えている。すなわち、A が言おうとした内容(Aの発話意図)と、B がそれから否定しようとした内容(Bの発話意図)は異なることになる。A は自分が述べよう(express)とする内容の中に、B が取り込もう(communicate)とする内容があると気付いていない、あるいは意図していない。A は「恩師と B が親子である」と言っているのであるが、その中に付随する意味(含意、connotation)として「(B から見れば) 恩師は B の父親であるにすぎない」とまでは言っていないことになる。そうすると、express されるものは

communicate されるものを包含し ((13)の図示を参照)、express されるが、communicate されるものが活性化(activated)されていないことなる。つまり、A は含意として発していないのであるが、B が勝手にその含意の部分を否定しているのである。

(13)



この吉村(2000a, b)の見方は、かなりの部分で的を射ていると思われるが、以下のいくつかの点で疑問を呈したく思う。まず第一に、メタ言語否定するためには、A が (communicateした意図はないのであるが) express するものの中から communicate され得ると B が解釈できるものでなければならない。確かに、(12)の例や、(2a)の発音、(2b)の一般会話の含意 (generalized conversational implicature)、(2d)の形態素、(2e)のスタイル/使用域 (style/register)、さらに次の(14)(15)の尺度の含意 (scalar implicature) はそれでうまく説明が可能である。

(14) A: Is that haggis good?

B: That haggis is not good; it's excellent. (van der Sandt 1991一部改) (haggis: ハギス (料理名))

(15) A: I ate some of the cookies.

B: You didn't eat (just) some of the cookies—you ate ALL of them. (Horn 1985一部改)

(14A)の good、(15A)の some からは、A は意図 (communicate) していないのであるが、言語形式上、good と some にはそれ以下ではないという量の含意 (quantity implicature: Q-based implicature (Horn 1989, Levinson 2000)) が存在する。B はその含意を否定して excellent, all と修正表現を述べている。

ところが、次の(16)ではこの説明は当てはまらない。

(16) [先輩の警官の不正を目にした Davis 巡査が、監査室に訴えようとする。ところが Bosco 巡査は、監査室長が不正を目の敵にするあまり、殴られて病院行きになったことを告げ、やめておけと言っている場面]

Davis: Are you frightening me?

Bosco: No, Davis. I'm educating you. (Third Watch 米 TV)

(16)は No, I'm not frightening you. と補って考えるとよい。frighten と educate には通例 good と excellent、some と all に見られるような含意関係はない。つまり、Davis の frighten には言語形式上 educate の意味はないのである。そうであるのに、この例がメタ言語否定であると感

じられるのは、Boscoの方が、frighten と educate を同一尺度上に持ってきているためと考えられる。Bosco は、frighten のような脅しの言葉ではなくて、婉曲的な educate という言葉を使って Davis のためになるようにしてやっているのだと言っている。尺度の基準は、〈脅迫的、婉曲的〉にある。発話行為としての婉曲性から見ると、educate の方が強い述語になる。このように、何を意図する (communicate) するかは、メタ言語否定の話し手の持つ意図にかかっているとすることができる。

次に、express/communicate は、メタ言語否定の特質に限ったことではないと思われる。例えば、吉村(2000b: 23)自身があげているメタフォリカルな発話や、アイロニカルな発話がその例である。さらに、次の例に見られるような誤解 (misunderstanding) や曲解 (distortion) も express/communicate で説明が可能である。

(17) (A) "I'm not very happy about what you're doing."

(B) "In other words, you don't trust me?"

(A) "I wouldn't quite say that." (田中 1998b: 238)

田中(1998b)では、in other words を、相手の含意を言葉にする「つなぎ語(connective word)」だとした。(17)では、B は A の「あなたのしていることにいい気持ちではない」という言葉から、A が意図していないが言語表現の中には生じているはずの「私を信用していない」という含意を誤解(曲解)して述べている。そのため、最後に A は「そこまで言っていない」と修正しているのである。A は「信用していない」を express しているが communicate はしていないことになる。このように、express/communicate という特質は、メタ言語否定だけの特質ではない。

最後に、吉村(2000a)も取り上げている「特定の会話の含意(particularized conversational implicature)」を考えてみよう。通例次のような「特定の会話の含意」はメタ言語否定されない。

(18) A: Smith doesn't seem to have a girlfriend these days.

B: He has been paying a lot of visits to New York lately.

A: !He hasn't been paying a lot of visits to New York lately; he's been paying a lot of visits there in order to see his accountant. (Carston 1996: 396) (cf. 吉村 2000a)

(18)の含意は He has a girlfriend in New York.. である。!の意味は、DN なら意味は通るが MN としてはおかしいということである。吉村流に考えるならば、この文脈では B は He has a girlfriend in New York を意図しており、communicate してしまっているため、A はメタ言語否定できないということになる。ところが、それでは、(14)(15)の「尺度の含意」はメタ言語否定が可能で、(18)の「特定の会話の含意」は不可能であることになり、同じ「含意」なのに一貫性がないことになる。⁵⁾さらに、注4で挙げた DN の例(次の(19))でも、A の命題内

容 (drive to work) は express されていると同時に communicate されている内容であるため、メタ言語否定できないことになる。ところが、否定されているのは、(18)の内容は含意であり、(19)の内容は命題 (ごく大ざっぱに言うに関連性理論では「表意」) であり、この両者を同一に扱うのは問題がある。

(19) X: Isn't it tiring for you to drive to work?

Y: I don't DRIVE to work; I JOG. (Carston 1996)

このように、express/communicate の説明は、MN のかなりの部分を説明できるように見えるのであるが、本質的な特質とはなっていないように思われる。次節でも述べるように、MN の特質は、前言の話し手 (=聞き手) の発話意図と、MN の話し手の発話意図が異なるために起こる現象であり、その際、吉村(2000a, b)の言うように、話し手は相手の express しているが communicate していない部分から触発されているにせよ、話し手は話し手独自の「尺度」、あるいは「基準」と呼べるものを持っているとすることができる。ただし、そのためには「上限」の設定や「矛盾」の解釈など、様々な制約が必要である。

2.4. 矛盾(contradiction)

Burton-Roberts(1989)は、「前提取り消しのメタ言語否定」の議論の中で、(3a)(3b)(3d)(3e)のような MN はすべて「意味論的(真理条件的)な矛盾(semantic(truth-functional) contradiction)」を表すとする。すなわち、次の(20a)(20b)(20c)の最初の節(前半部)を聞いた聞き手は、通常の記述的否定(DN)と解釈するが、後の修正節(後半部)を聞いて、前半部と矛盾する解釈に陥ってしまい、前半部の否定を語用論的、メタ言語的に再解釈するとされる。この矛盾の解釈は Horn(1985, 1989)でも述べられており、MN の唯一、決定的な特徴とされている。

(20) a. I'm not his daughter—he's my father!

b. We didn't engage in sexual intercourse, we made love.

c. I didn't read the paper and get up, I got up and read the paper.

例えば、(20b)は、engage in sexual intercourse と make love は命題内容からすると「性交する」という意味で同義表現である。この最初の節(前半部)では、その命題内容を意味論的に否定しているのであるから、ここまで聞くと通例は「性交はしなかった」という意味になる。ところが、後の節(後半部)では同じ意味の made love と述べているため、意味論的、真偽値的に矛盾に陥ってしまうことになる。そこで、この否定はメタ言語的であると語用論的な解釈に至り、「性交(というような言葉で表される行為)はしなかった」、それどころか「愛し合った(というもっと純粋な行為をした)」という解釈が生じる。

これに対して、Carston(1986)は、矛盾が MN の唯一、決定的な特徴ではないことを以下の

点から例証している。まず、次のような例は、Burton-Roberts (1989)は矛盾が感じられないとして MN に入れないが、Carston (1996)は、彼女の基準 (エコー否定であること) からすると、MN の例になるという。⁶⁾すなわち、(21)は矛盾ではない MN であるため、矛盾は MN の唯一、決定的な特徴ではないことになる。

(21) a. He doesn't need FOUR MATS; he needs MORE FATS.

b. X: You seem amused by my problem.

Y: I'm not Amused by it; I'm Bemused by it.

c. I didn't put him up; I put up with him.

(21a)は言い間違いの訂正である。⁷⁾(21b)は、amused を否定して bemused で韻を踏んだ訂正である。(21c)も同様に、意味内容は「彼を泊める (put him up)」と「彼の家に泊まる (put up with him)」とで違っているが、put up という同音の表現を使って訂正している。これらは、前半と後半の部分は命題内容が違うので、前半の否定を聞いて後半の修正節を聞いても矛盾は感じられない。例えば、(21b)は amused (面白がる) と bemused (当惑する) は意味内容が異なるからである。

これらの例では、矛盾が感じられていないのであろうか。この問題を解く鍵は、話し手にとっての矛盾と、聞き手にとっての矛盾を分けることにあると思われる。(21b)の (否定の) 話し手 Y は何を否定しているのであろうか。もし Y が X の言葉を引き取って命題内容のみを否定しているとするならば、すなわち「amused ではない (面白がっているのではない)」とのみ言っているならば、そのあとで「bemused である (当惑しているのだ)」と修正しているのであるから、矛盾は感じられない。つまり、Burton-Roberts(1989)の言うようにこれは MN ではなく、(4)の「カバを見たのではなく、サイを見たのだ」と同じように DN ということになる。ところが、ここで問題としているのは、amused と bemused という音声的な類似性である。Y は X の言葉から、命題のみならず、amused という bemused と似た音声までも引き取って (エコーして) 否定しているのである。Y にとって、否定の焦点は音声的な類似性である。命題内容としては amused と bemused は違う種類の命題上 (違う尺度上) にあり矛盾ではないが、音声的には韻を踏んで違うことを言っていることになる。そのため、MN 的なおかしさが生じている。もし、bemused が puzzled とか confused ならその種のおかしさは生じることはなく、単なる DN になる。

これに対し、(2a-e)や(20a-c)のような、完全な MN の例は、通例言われているように矛盾が感じられるのであろうか。(14)の例をもう一度考えてみよう。

(14) A: Is that haggis good?

B: That haggis is not good; it's excellent. (van der Sandt 1991一部改)

筆者は 2.2 の議論で、話し手がエコー否定してるものは「命題」以外の「使用条件 (含意、音

声など)」であるとした。(14)の場合、エコー否定しているものは good の持つそれ以上ではないという尺度の含意 (scalar implicature) のみである。すなわち話し手 B にとってはこの否定は矛盾ではないことになる。B は「ハギスがおいしくない (=まずい)」とは思っていない。すなわち自分の信念としては表明していない。B はあくまでも、ハギスのおいしさという同じ尺度上で並んだ <good, excellent> の good を否定しているのであるから、「good ではなく excellent である」と言っても、何ら矛盾しない。ところが、B の発話を聞いた聞き手 A は、「good ではない」と言われると「まずい」のではないかと default 的に解釈してしまう。そのため、excellent という言葉を聞いて矛盾を感じてしまうのである。

このような、MN の話し手の発話とその聞き手の解釈の不一致は、MN のすべての例についてみられる特徴である。

(22) 「古田は言っています。『私は 4 番バッターじゃなくて、4 番目です』と。」(1997年10月19日、朝日放送アナウンサーがプロ野球中継 (ヤクルト・巨人戦) で述べたコメント)

(23) カリエスを心配して病院に行った友人がいる。当人はカリエスだと信じ込んでいたようで、医者にもそう伝えた。医者は検査をして、こう言った。

「大丈夫。カリエスではありませんでした。あなたはガンです。」(永六輔『大往生』)

(田中 1998a)

(22) では、古田は「あなた方が思うような 4 番ではない」と言っており、否定しているのは「4 番バッターが持つ打線の中心のスラッガーとしての役割」のみである。古田の中では、「4 番バッターでない」ことと「4 番目」であることは矛盾していない。(23) も同様で、医者が否定しているのはあくまで、「カリエス」に付随する「死なない病気である (治る)」というこの友人が疑いもしない含意の方である。それゆえ、この医者にとっては、「カリエスでない」ことと「ガンである」ことは矛盾しない。ところが、(22)(23) を聞いた聞き手は、「4 番バッターではない」= 「4 番以外である」、「カリエスではない」= 「ガン (というような死病) ではない」ととるのが default 的な解釈であるため、矛盾を感じ、「惑わし発話 (garden-path utterance)」と感じる。

以上をまとめると、MN は話し手にとっては矛盾とは感じておらず、矛盾はあくまでも聞き手に感じられると考えられる。話し手が何をエコーして否定しているかを考慮に入れると、DN、DN 的な MN ((21a-c)、MN ((2a-e), (14), (20a-c), (22)(23)) の特徴は次のようになる。

(24)	エコー否定しているもの	矛盾の有無
DN:	命題	無し
DN 的な MN:	命題 + 使用条件 (音声、含意など)	無し

MN:	使用条件（音声、含意など）	話し手にとっては無し/聞き手にとっては有り
-----	---------------	-----------------------

Carston (1996: 315-316)は、MN は矛盾ではないとする論証に、次のような例で説明している。

- (25) a. They didn't fall in love and get married; they got married and fell in love.
 b. semantics: not [P & Q]; Q & P
 first pragmatic processing: not [P & then Q]; Q & then P

(25a)の意味論的意味を考えたものが、(25b)の最初の行にある。次に、語用論的には、関連性理論で言う表意(explicature)のレベル（命題と置き換えてもよい）で、and は時の前後関係を表す then の意味を付け足され、富化(enrichment)が行われているとされる。すなわち、聞き手は、最初の節（前半部）を聞き終わったときには、富化によって、then の意味を了解している。そのため、聞き手は矛盾は感じないということになる。

しかし、むしろ、矛盾を感じないのは話し手の方ではないだろうか。話し手は、then の意味を否定していると考えた方がよい。それが聞き手に最初はうまく伝わらないのである。聞き手にまで、then の意味が伝わるとすると、(25a)の持つ、「感わし発話」の効果が説明できない。then の意味を explicature と考えると、命題否定である DN と区別ができないことになる。

2.5. 上限

Levinson(2000)は、「量の含意(Q-based implicature)」から、MN を説明している。量の含意とは、Grice (1975)以来の「量の公理(Maxim of Quantity)」の前半部「必要とされている情報をすべて与えよ」から、「それ以上ではない」という含意が生じることを言う。例えば、次の(26a)では、「にんじんを3本食べれば」、「2本や1本は必ず食べていて(John ate at least three carrots.)」意味的含意(entailment)、「4本以上は食べていない(John ate at most three carrots.)」(量の含意)ということになる (cf. 五十嵐 2000)。(26b)はその否定文であるから、DN の解釈では、「最低3本食べたのではない」のであるから、量の含意を否定することなく、「4本5本は食べていない」(意味的含意)し、「2本や1本は食べている」(量の含意)ということになる。今までの筆者の議論に沿って言うと、DN は命題内容のみを否定し、使用条件(量の含意)は否定しない。

- (26) a. John ate three carrots.
 b. John didn't eat three carrots.
 c. [John ate at least three carrots] & [John ate at most three carrots]
 d. John didn't eat three carrots; he ate four.

さらに、Levinson(2000)で説明が難しいと思われるのは、(2a)の発音や(2d)の形態素、(2e)

の使用域 (レジスター) など、「Horn 尺度 (Horn scale)」⁸⁾の考えにくい例である。例えば、(2d)の先行発話と考えられる I managed to trap two mongeese. と言っても、John ate three carrots. のように、量の含意が生じていない。すなわち、(26d)や He is not happy; he is ecstatic. では、それぞれ three, happy の上限 (upper bound) を破っている否定であるが、(2a)(2d)(2e)では何を「上限 (upper bound)」とするのが設定できにくい。このように、語用論的な Horn 尺度は、MN の場合すべての例に当てはまるのではない。

ここでは、まず、量の含意そのものを問い直すことにする。それには、「MN の話し手が持つ尺度の上限」と、「聞き手 (先行発話の話し手 = MN を聞いている聞き手) の持つ尺度の上限」は異なることを指摘したいと思う。もう一度、量の含意の否定の例を見てみよう。

(27) A: Is he happy?

B: He is not happy; he is ecstatic.

上述したように、Levinson (2000) あるいは Horn (1985, 1989) の説明では、(27)は He is happy. は「ちょうど happy であり、それ以上ではない」という (量の公理の前半部から生じる) 量の含意が生じている。(27B)の MN は、その含意の方を否定し「それ以上でないことはない」すなわち「恍惚状態 (ecstatic) である」ことを述べている。Levinson, Horn の説明では、話し手は happy の上限を破る否定を行っていることになる。ところが、これだけでは、2.3 節で述べた話し手 B の発話意図と聞き手 A (=先行発話の話し手) の発話意図が異なることや、何故、A は矛盾と感じ B は感じていないのかななどを説明することができない。むしろ、Levinson, Horn の説明は、A の方の解釈に当てはまるのではないだろうか。では、MN の話し手 B はどういう上限を持っていると考えられるのであろうか。

Levinson に従って、happy, ecstatic を強い述語、弱い述語の順に <ecstatic, happy> と書く。MN の話し手 B は、彼 (He) については最初から ecstatic の強い述語 (立言) の方を信じていると考えられる。すなわち、B は Grice の量の 2 番目の公理、「必要以上の情報は与えるな (必要とされる最小限の情報を与えよ)」が成立すると信じていることになる。ところが、A が、B の信念 (予想) に反して、自分が信じている情報より少ない量の情報を述べたのである。A が与えた情報は、B が信じていた情報より少ない情報である。B はそれ以下ではないと思っていたのに、それ以下だとされたので反論しているのである。つまり、B は「より少ないことはない (happy ではない)」ことを主張していることになる。

通例、次例に見られるように、より少ない情報を提示されると、より多い情報は成立しないことが含意される。

(28) A: そこへは、私たちはどうやって行くことになるの。

B: ええと、私はデイクの車に乗せてもらうことになっているんだけど。(Thomas 1995)
B が与えている情報は、A が要求している情報より少ない。そのため、A が要求している情報

は成り立たないことが含意される。この場合は、Aは車に乗せてもらう手はずには入っていないとBは言っているのである。

(27B)は、より多い情報が成り立たないことはないと言っているのである。通例の happy だからと言って ecstatic が成り立たないことはないと言っていることになる。話し手 B は、happy が成り立たないと最初から思っていたのではなく、自分が信じる ecstatic が成り立たないと言われたことへ反論してるのである。(23)でも同じことが当てはまる。

(23) カリエスを心配して病院に行った友人がいる。当人はカリエスだと信じ込んでいたように、医者にもそう伝えた。医者は検査をして、こう言った。

「大丈夫。カリエスではありませんでした。あなたはガンです。」(永六輔『大往生』)
この医者は、友人の「カリエスではないか」という心配から、自分が持っている「この人はガンである」という信念が否定されるものではないことを述べている。当然、死病という尺度上では、〈ガン, カリエス〉という強弱の順序になる。

ところが、(27B)を聞いた A、(23)では医者の言葉を聞いた友人の解釈は、あくまで、Levinson, Horn 流の(第1番目の)量の含意を否定されたこととすることになる。そのため、聞き手は自分の持つ尺度(解釈)から抜け出ることができず、誤解してしまう余地もある。次の(29)の3行目の A の発話に注意されたい。

(29) A: The next Prime Minister will be Wilson.

B: It won't be Wilson, it'll be Heath or Wilson.

A: Are you saying it'll be Heath?

B: Certainly not! I'm simply pointing out you can't be so sure it'll definitely be Wilson.

(Burton-Roberts 1989一部改)

このように考えると、MN の話し手の発話意図と、その聞き手 (= 先行発話の話し手) の解釈は全く異なることになる。そのためには、MN の話し手は自分自身が信じる尺度の上限を持っていなければならない。聞き手の尺度の上限はそれよりは弱いことになる。

ただし、これだけでは上述した(2a)の発音や(2d)の形態素、(2e)の使用域(レジスター)など、「Horn 尺度(Horn scale)」⁸⁾の考えにくい例は説明し切れていない。そのためには、「尺度の上限」という基準を、MN の話し手が「正しいと信じる項目」まで含めた方がよいと思われる。正しい項目は、正しくない項目と強、弱の順序対(ordered pair)をなす。では、次例を考えてみよう。

(30) 「障害は不便です。だけど不幸ではありません。」⁹⁾ (乙武洋匡『五体不満足』)

(30)は、通例の MN の否定と修正節の順序が入れ替わった例である。いままで見てきた MN では、「障害は不幸ではありません。不便だけです」となる。こすうると、「不幸ではないのなら、幸福かというところではなくて、不便だけである」という MN である。(30)はその

結論から先に持ってきている。通例は、「不幸」と「不便」は別の尺度にあり、強弱の差がないと感じられる。それでも(30)で話し手が正しい(「障害」の記述に当てはまる)と思うのは「不便」のほうであり、「みんなが思うように『不幸』ではない」と言っている。話し手にとっては、自分が正しいと信じている「不便」が、一般に想定されている「不幸」より情報量が多く、価値があるのである。

3. おわりに

以上、MNの特徴をいくつか述べてきた。まず、MNは先行発話の使用条件(発音、含意など)を引き取った、自分の信念ではない「エコー否定」である。次に、先行発話の話し手(=聞き手)の発話意図と、MNの話し手の発話意図が異なり、それを聞いた聞き手の解釈も異なる。さらに、MNと後ろの修正節は矛盾関係(contradiction)にあるが、それは、MNの話し手の意識の中では矛盾ではなく、聞き手(=先行発話の話し手)にとっての矛盾となる。最後に、MNと感じられるためには、話し手が前もって量的・質的な上限を持っていなければならない、それと聞き手の上限は異なっている。このように、MNの話し手の発話意図と、聞き手の解釈を分けて考えると、MNの特質が浮かび上がってくるように思われる。

注

- 1) mention theory とは、相手の言ったことを繰り返す(エコーし)、その内容を相手に帰することである。つまり、自分の信念とはしていないということである。さらに、話し手はその内容に何らかの態度を表現している。例えば、It's a lovely day for a picnic, indeed. では、相手の言ったことを繰り返す述べ、それに「不快感」「皮肉」という態度を表明している。
- 2) ただし、「真理条件的」というのは多少 misleading であろう。Carston(1996: 324)はエコー否定としか言っていない。
- 3) 「惑わし発話」とは、MNを聞いたあと修正節を聞くとMNと矛盾する内容のため、解釈不能に陥り、もう一度最初から解釈し直すことを言う。
- 4) 次のような例も、Carston(1996: 322)は矛盾を含まないMNと考えているようであるが、やはりDNであろう。drive と jog の尺度が違っており、別の枠で修正している。仕事へ車では行かないと言っているのであるから、通例それから連想されるのは電車通勤とか、歩くことになる。ジョギングすることは通例は聞き手の視野に入らないことなので、「惑わし発話」的な効果が出ることになる。
 X: Isn't it tiring for you to drive to work?
 Y: I don't DRIVE to work; I JOG.
- 5) ただし、「関連性理論(Relevance Theory)」では、some/not all の尺度の含意を推意(推意)としては認めない。表意(explicature)ということなる。

- 6) Kempson (1986)と Foolen (1991)はこれらは潜在的な MN としている。Horn (1985)も同じような例を挙げている (Carston 1996: 315)。
- 7) 日本語では、「暑い夏」を「なついあつ」と、音の交換で言い間違えるような例である。頭音転換 (spoonerism) という。英語では、a crushing blow と言うべきところを a blushing crow のように言うこと。そのような言い誤りをしばしばしたことでは有名な英国の牧師 W. A. Spooner (1844-1930) の名にちなむ (『ランダムハウス英語辞典』(小学館))。 (22a) と同じような例を作ると、次のようになる。
(i) 「なついあつ」じゃなくて「あついなつ」だよ。
- 8) Horn 尺度 (Horn scale) とは、Horn (1989) によれば、three と four、happy と ecstatic のような語用論的尺度を言う。Horn の表記法では、より強い要素 (S) を右に、より弱い要素 (W) を左に、<S, W> のように書く。<ecstatic, happy> となる。さらに、S は W を意味的に含意し (entail)、その逆は成立しない (五十嵐 2000)。
- 9) この例は修正節が最初に来る。Carston (1996) は、修正節が最初に来た例は、感嘆し発話ととれないとしている。この例はどうであろうか。話し手は、自分の尺度で正しいと思う言い方(「不便」)を最初に持ってきている。それだけでも話し手は、障害に関して一般の想定とは違う尺度の陳述をしており、聞き手に「え?」と思わせる効果がある。確かに聞き手はもう一度前に戻っての解釈はしないが、自分の想定とは違うため一時的に解釈不能に陥っているといえることができる。

参考文献

- Burton-Roberts, Noel. 1989. "On Horn's Dilemma: Presupposition and Negation." *Journal of Linguistics* 25, 95-125.
- Carston, Robyn. 1996. "Metalinguistic Negation and Echoic Use." *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.
- . 1998a. "Negation, 'Presupposition' and the Semantics/Pragmatics Distinction." *Journal of Linguistics* 34, 309-350.
- . 1998b. *Pragmatics and the Explicit-Implicit Distinction*. Ph.D. Dissertation. University College London.
- Foolen, Ad. 1991. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity: Some Comments on a Proposal by Laurence Horn." *Pragmatics* 1, 217-237.
- Grice, Paul. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, vol. 3, *Speech Acts*, pp. 41-58. New York: Academic Press.
- Horn, Laurence. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61, 131-174.
- . 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 五十嵐 海理. 2000. 「メタ言語的否定」の新分類『六甲英語学研究』第3号, 1-14.
- Kempson, Ruth. 1986. "Ambiguity and the Semantics/Pragmatics Distinction." In C. Travis (ed.) *Meaning and Interpretation*, pp. 77-104. Oxford: Blackwell.
- Levinson, C. Stephen. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*.

- Cambridge, Ma.: MIT Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995?. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 田中廣明. 1998a. 「メタ言語否定における非現実認識」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『小西友七先生傘寿記念論文集・現代英語の語法と文法』 pp. 270-279. 東京: 大修館.
- . 1998b. 『語法と語用論の接点』東京: 開拓社.
- Thomas, Jenny. 1995. *Meaning and Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.
- van der Sandt, Rob A. 1991. "Denial." *CLS 27/2: The Parasession on Negation*, 331-344.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber 1988. "Linguistic Form and Relevance." In Ruth Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*. pp. 133-153. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1992. "On Verbal Irony." *Lingua* 87, 53-76.
- 吉村 あき子. 2000a. 「メタ言語否定と関連性理論」『学習院大学言語研究所研究集会：関連性理論研究は認知・言語の研究に何を寄与しうるか』口頭発表.
- . 2000b. 「メタ言語否定と関連性理論」『英語青年』第146巻 第7号, 438-439(22-23).